

勇次Ⅱ

作・すぎむらとしはる

◆登場人物

立花勇次 山東会のチンピラ。元美学科の大学生。

高橋良治 山東会のチンピラ。風俗のスカウトマン。

竹田 明 山東会のチンピラ。兄貴分を刺して収監されていたが出所してくる。

葵マリエ 勇次の元恋人。故郷から上京して来ている。

山^{やま}女^め権太 山東会の親分。

春日井次郎 山東会のヤクザ。

山本進児 山東会の新人。大学卒。

李 成民 中国からの引き揚げ者。小さい子供を育てている。

榎本拓也（大女） 勇次の大学時代の同級生。

刑事 少年犯罪に執念を燃やす女刑事。

役者 映画俳優。

監督 映画監督。

サラリーマン 通りすがりの通行人（役者か監督と兼ねて良い）。

女 通りすがりの女性。（刑事と兼ねて良い）

新宿・路地裏

新宿。二丁目。

昼下がりに。人通りは少ない。

街角に佇む男。勇次と良治。

どこからともなく女。通りすぎようとする。

良治「おねえさん。」

女、立ち止まる。

良治「ちよつと、ぼくとお話ししませんか。」

女「結構です。」

良治「そんなこと言わないでよう。」

女、一瞥して通り過ぎる。

勇次、ヤル気がなさそう。

良治「ちったあ、真面目にやれよ。」

勇次「ああ。」

良治「（勇次に）おい。」

良治、じつと勇次を見ている。

勇次「なんだよう。」

良治「おまえじゃ無理だな。」

勇次「何が。」

良治「おまえは目障りだ。あっちへ行ってる。」

勇次「どうぞ。」

良治「何が。」

勇次「さっさとひっかけてみろよ。」

良治、勇次を睨む。

良治「ろくな女が通らねえからしようがねえだろう。」

勇次「誰がここでスカウトしようって言い出したんだ？」

良治「ちよつと、待ってるよ。いまにスゲエ奴ひっかけてやつからよ。何だよ。」
勇次「お手並み拝見。」

良治「ちえつ。だいたいおまえみたいなしけたツラしたやつがいるとうまくいかねえんだよ。」

勇次「人のせいにするなよ。」

良治「まあ、見てなつて。あせらずじつくりいこうぜ。」

勇次「あせってるのはおまえだろ。」

良治「まあ、聞け。女一人紹介すればいくら入ると思う？」

勇次「えっ？さあ。」

良治「まあ、たいしたことないな。」

勇次「何だ、その思わせぶりな言い方はよう。誰だつて大金を期待するだろう。」

良治「おつ、少しは期待したか。たまにはおまえの脳みそも活用しなきゃな。」

勇次「何だよう。」

良治「まったくもつたいねえよなあ。せつかく入った大学辞めちまつて。」

勇次「行く気がなかったんだよ。」

良治「行く気がないんなら最初からいかなきゃいいだろう。」

勇次「そんなもの行つてみなくちゃわからないだろう。」

良治「ちえつ。いいよなあ、ボンボンは。」

勇次「なに、痴漢野郎にそんなこと言つてもらいたくねえよなあ。」

良治、勇次の胸倉を掴む。

良治「二度と痴漢野郎つて言うな。」

勇次「はーん。」

良治、手を離す。勇次、そつぽを向く。

良治「おい、いいかげん客を捕まえて来いよ。またおやじに怒やされるぞ。」

勇次、相変わらずそつぽを向いている。

良治「ちえつ、ちよつと場所変えだつと。」

良治、退場。

勇次「マリエ…。」

故郷の海辺

マリエ、登場。

勇次「昨日、夢を見た。」

マリエ「どんな夢。」

勇次「都会の真ん中で押し潰される夢。」

マリエ「…。」

勇次「今の気持ちそのまま…。」

マリエ「最初からそんなこと言っただろうするの。」

勇次「え？」

マリエ「いつもの調子はどうしたの。」

勇次「うん…。」

マリエ「勇次は優等生だもんね。」

勇次は寂しそうに瞳を伏せる。マリエはそれを覗き込むようにしている。

勇次「おれはそんな自分が嫌だった。あの子はいい子だって言われている自分に反抗できなくて、時々、憑かれたように、そんな殻を打ち破っていきたい衝動に駆りたてられる時があつて…いつも人の目を気にしている自分がそれを押さえつけてるんだ。」

マリエ「…。」

勇次「おれは高校で何をしてきたのだろうってね。」

マリエ「勇次…。優等生に退屈。」

勇次「まだ言うのか。」

マリエ「ふふふ。」

波の音。

勇次「なんかとてもおぼろげなんだけど、自分がしていくこと、何か…避けて通れないような…。」

マリエ「勇次らしい。」

勇次「え？」

マリエ「優等生の勇次らしい。」

勇次「…。」

マリエ「優しい勇次らしい。」

勇次「そういう意味か。」

マリエ「もう一つ。」

勇次「？」

マリエ「ぼんぼんの勇次らしい。」

勇次「何。」

マリエ「生活に追われてたらそんな風に考えられないわ。」

勇次「馬鹿にしてるのかよ。」

マリエ「いつも理屈っぽくて現実に根を生やしてない。」

勇次「…。」

マリエ「わたしは高校を出たらすぐ働くわ。」

勇次「でも、今の時代に生活の為はないだろう。」

マリエ「全部じゃないけどね。でも大きな理由よ。」

勇次「こんな風に考えられる自分に感謝しなさいって言うのか。」

マリエ「そうね。」

勇次「…。」

マリエ「傷ついた？」

勇次「少し。」

マリエ「雨が空から降れば…か」

勇次「それは知らないな。」

マリエ「ふふ、何となくそんなことを言ってみただけ。」

勇次「おれは、すぐいろいろんな事に真剣なのに大人たちはそれをまるでわかってくれない。」

『おまえたちは〈戦争を知らない子供たち〉も知らないくせに』って。」

マリエ「戦争を知ってる世代と知らない世代ってまるで違う人種だって聞いたことがあるわ。」

勇次「おれはそれがわかりたいんだよ。自分の知らないことが嫌なんだ。体験したことは必然だったのに、それが、あたかも自分の意志で築いていったかのように言う奴らが嫌いなんだ。おれだってその場にいたら当然、銃を取っていたさ。だけど、たまたま、こういう時代だっただけのことじゃないか。」

マリエ「ほとんどの人はそれを幸福だと思っわ。」

勇次「思わないね。」

マリエ「…。」

勇次「どうして黙ってるんだよ。」

マリエ「いつもこんな風に喧嘩ばかりね。」

マリエは立ち止まり、遠くの水平線を見ている。

マリエ「（涙をこらえるように）あたし、嫌だ。こんな風に別れるの。風になりたい…。」
勇次「…。」

マリエ「勇次、嫌だ。あたしはずーとここにいるのよ。勇次は自分の好きなように生きて屁理屈ばかり言って大人になったような気分にいるけど、ここに残って嫌でも生活に縛られて生きていかなければいけない人はどうするの。」

勇次「…。」

マリエ「勇次…。あたしは、ただ勇次が好きだけ。」

カモメが鳴く。

勇次「かもめだ。風になりたいか。」

マリエ「勇次になりたいわ。」

勇次「え？」

マリエ「何も。」

かもめが鳴く。だんだんと薄暗くなってくる。

マリエ「行くわ。」

勇次「うん。」

マリエ「お別れね。」

勇次「また逢えるよ。」

マリエ「もう逢わないわ。」

勇次「…。」

マリエ「もう逢えない、そんな気がする。」

勇次「逢えるよ。」

マリエ「…逢わないわ。」

勇次「…。」

マリエ「寒い。」

勇次「みろ、おまえが風になりたいなんていうから風がでてきただろう。」

マリエ「寒い。」

マリエ、勇次を見ている。

マリエ「ちょっと、待って。」

マリエ、勇次に近づき優しくキスをする。

マリエ「さよなら。」

マリエ、去る。

新宿・路地裏

良治、戻ってくる。

良治「あーあ、今日はさっぱり駄目だ。新手の奴らがおれたちの縄張りを荒らしてやがる。まあ、しけた相棒と一緒にじゃなお効率が悪いけどな。」

勇次、反応しない。

良治「先、戻ってるぜ。そんじゃあな。」

良治、去っていく。

勇次（独白）「おれは栄治さんが刺された後、学校を辞めました。美学なんて学問が何の役にも立たないことがよくわかったのです。おれはそれから良治に出会いました。山東会の下っ端ですが、いろいろな面倒見がいい奴で何かとよくしてくれました。それが縁でおれは山東会に出入りするようになりました。まだ盃はもらっていませんが、良治の兄貴筋にそのうち盃をもらう予定です。いまは行儀見習いといいますが何でも屋です。たまたま風邪をこじらせた奴がいて、ここのところ一週間は良治と一緒に女の子のスカウトをしています。スカウトといってももちろん歌手デビューさせるわけではありません。風俗店に売っぱらうのが目的です。今の子は金目当てにすんなり誘いに乗ってきます。もう堕ちて行くなんて言葉は死語なんでしょう。こんなことをはじめてからわたしは女の子が抱けなくなりました。人類が兄弟とはよく言ったもので、そこもかしこも兄弟だらけのような気がして気持ち悪くて仕方ありません。まったく男もこうくさくさしてはいけません。何かカーッと燃えるようなものを探しているのですがなかなか見つかりません。まあ、良治とこうしてふらふらしながら馬鹿やっているのも随分気が紛れて良い気分です。まだこうしているのも悪くない。」

山東会事務所

勇次、良治、山女親分がいる。

山女「おい、勇次。今日は何しとった。」

勇次「はい？」

山女「真面目に仕事しとったか。」

勇次「はあ。」

山女「何がはあだ。一日中ほつつき歩いて一人もゲットできんとはどういうことだ。」

勇次「すんません。」

山女「真面目にやらないとこれだよ（手を首にやる）。」

勇次「馴れないもので。」

山女「馴れ？気合だよ、気合。」

勇次「気合ですか。」

山女「そう。良治を見てみる。どっこもいいところないだろう。」

良治、山女を睨む。

山女「それでもしこたま女の子がゲットできるということはハートよ、心よ、真心よ。」

勇次「何か少し違うような気がするんですけど。」

山女「違わない。おまえはそういう理屈っぽいところがいけないんだ。若いんだからもつとこうパーツとやれ、パーっと。」

勇次「でもヤモメ親分。」

山女「ヤモメじゃない、ヤマメだ。」

勇次「すいません。でも、女の子の中には騙されたって訴える子もいるんじゃないですか。」

山女「いない、いない、しこたま稼げてチャホヤしてもらえるんだ。最初は嫌がっていてもすぐに馴れるさ。それにエクスタシーの嫌いな女はいないからなあ。」

勇次「仕事でしょう。」

山女「仕事半分、実益半分。ピンサロの二人に一人は本番やらせるからなあ。」

良治「うそ。」

山女「ほんと。わしなんか千二百三十六打数五百四十六安打、四割四分二厘だ。」

良治「（小声で）野球かい。」

勇次「親分、自分の店に自分でいっちゃ駄目でしょう。」

山女「そう固いこと言うな。ちゃんとサービスしてくれたら給料上げてやるって、な。」

良治「そりゃあセクハラじゃないですか。」

山女「風俗にセクハラもくそもあるか。あるのは正義だけよ。」

良治、勇次、首をひねる。

良治「親分、どうにもオレには理解できないんですけど。」

山女「頭で考えるな。体で感じるんだ。」

良治「はあ。」

山女「それはそうと、明のガキがそろそろ出所してくる頃じゃないか。」

勇次「いえ、よく知らないんで。」

山女、勇次の方を見ている。

山女「いっぺん、出てきたらワシのところに寄れって。」

勇次「はあ。どうなるんですか。」

山女「それ相応のことは考えとる。」

次郎、山本進児を連れてやってくる。

山女「誰じゃ？」

次郎「新人です。いまから山東会心得を叩きこんでやろうと思ひまして。」

山女「大卒か？」

山本「はい。」

山女「ふーん。銀行とか行かんかったんかい？」

山本「はい、やっぱり、使われるより使う方が。」

一同、首をひねる。

山女「まあ、それもよからうて。しっかり頼むぞ。」

山本「はい。」

山女、退場。

次郎「おまえたちはあっちへ行つてろ。」

勇次、良治「はい。」

勇次、良治、退場。

次郎「今から山東会心得を斉唱する。」

山本「はい。」

次郎「言ってみろ」

山本「え？」

次郎、山本を睨む。

次郎「何？」

山本「今日はじめてなんですけど。」

次郎「だから何だ？この世界はいちいち目上の人間に口ごたえしちやあいけねんだ。」

山本「はあ…。」

次郎「親が白と言ったら例え黒いものでも白だ。」

山本「はあ…赤いものは赤ですか。」

次郎「赤いものも白だ。」

山本「はあ…。」

次郎「おまえ素人か。」

山本「いえ、何度も舞台経験は…。」

次郎「そんなこと聞いてんじやない。」

山本、アクビをする。

次郎「人が話してる時にアクビをするな。」

山本、うんうんとうなづく。

次郎「おらあなあ、人を殺したことがあるんだ。」

山本、再びアクビをする。

次郎「てめえ。本当におれを怒らす気か。」

山本、次郎をじっと見ている。

山本「すみません。もう帰るところないんで。」

次郎「そうだろう。だったらもつと真面目にやんなきゃ。」

山本「はい。ひとつ、人の道は任侠にあり。」

次郎「そう。」

山本「ふたつ、振り向けばイイオトコ。」

山本、振り向いてニカッとする。

次郎「違う！」

山本「すみません。」

次郎「おい。」

山本「…。」

次郎「おまえは何でここに来た？」

山本「使われるより使う方になりたくて。」

次郎「それはわかったって。金儲けか？」

山本「お、お金？欲しいです。」

次郎「金なんか稼げないよ。」

山本「でも、でっかいキャデラックに乗ってるじゃないですか。」

次郎「あれレンタカー。」

山本「レンタカーって、毎日レンタカー乗ってるんですか？」

次郎「冗談にきまつてるだろう。」

山本「なんだ。」

次郎「でもよう、そういう時には『男になりたくてここに来ました』ぐらい言って欲しいよなあ。」

山本「男になりたくてここに来ました！」

次郎「よし、おれが若い時に着てた制服をおまえにやる。ついて来い。」

山本「はあ、せ、制服？」

次郎、山本、退場。

新宿・路地裏

勇次、良治、登場。明がやってくる。

明「（袖に向かって）どうもお世話になりました。」

明、勇次と目が合う。二人、しばらく見つめ合う。明、勇次に抱きつく。

勇次「（良治を指し）おう、相棒。」

良治、ニヤッと手を挙げる。明もニヤッと手を挙げる。

良治「勇次から聞いてたよ。やらかしちゃった奴がいるってな。」

明、下を向く。良治、明の肩をたたく。

良治「まあええがや。」

良治、ニヤリと笑う。明もつられて笑う。

勇次「山東会は栄治さんが刺されてから山女の親分が仕切っている。」

明、勇次を見る。

勇次「おまえに指図した村岡組はあの後、どうした。一度でも面会に来たのかい。それに出所した日になぜ一人も出迎えに来ないんだ。おかしくないか。」

明は勇次の方を恨めしそうに見ている。

明「山女はもういいよ。おれがちっちゃいころかわいがってもらった叔父貴がいるんだ。ちよつとそこに行ってみようと思ってる…。」

勇次「へえー。」

明「その前に兄貴の墓参りに…。」

勇次「ああ。」

明「そんなじゃ。」

明、行こうとする。

勇次「栄治さんの墓…どこにあるのか知ってるのか。」

明「知ってる…あの橋…泪橋に決まってるだろう。」

勇次（声）「おれはその時、明を兄弟のように愛しく思いました。」

背後に新宿の街並みが現れる。

勇次（声）「美学とは現実とは程遠く、美学とは人間が人間らしく生きる人の道なのです。」

暗転。

泪橋

栄治の墓。明、バラを置く。

明、「若鷺の歌」を口ずさみながら、目がすわって、体が震えている。しだいにそのまま寝込んでしまう。李成民、登場。李成民、中国拳法の六大式（基本の型）をはじめ

李「おい、明、いつまで寝ているんだ！」

明、ガバッと起き上がる。

李「はい、六大式。」

李成民、明、六大式を始める。

李「はい、収式。」

六大式を終える。明、ペタリと座り込む。李成民、苦笑い。

李「ここはどうだ。」

明、うなずいている。

李「山女が何を言っても気にするな。」

明、うなずいている。

李「おまえはまだ未成年だ。将来がある。」

明、李の方を見る。

李「だから…気にするな。」

明「…。」

李「よし、もう一丁。」

明「えっ？」

李、明、弾腿（たんたい）（中国拳法の基本套路）を始める。

勇次（独白）「李成民老師は刺された栄治さんの兄貴筋にあたる人で終戦直後のヤミ市で外国人たちを束ねていた人でした。今もその実力は隠然たるもので、山女の親分といえどもうかつには手がだせません。明はその老師にとってもかわいがられていました。栄治さんを刺して出所してきてからも老師は同じように明を可愛がりました。」

暗転。

マリエの部屋

マリエ、登場。赤い絨毯が敷かれている。電話、鳴る。

マリエ「はい。今ですか？いいですよ。ホテルプラネッツですか。ええ、知ってます。そうですね…あと四十分もあれば。ええ、わかりました。じゃあ、すぐ支度します。」

良治、起きあがる。

良治「（赤い絨毯を見て）何だ、こりゃ？」

マリエ「模様替えよ。」

良治「何時？」

マリエ「七時。」

良治「えっ？暗いなあ。」

マリエ「夜の七時よ。」

良治「夜？おれの朝は？」

マリエ「そんなの知らないわよ。」

良治「どこに行くんだよ？」

マリエ「仕事よ。」

良治、再び寝転ぶ。

良治「ホテルプラネッツはカメラが仕込んであるから気をつけるよ。」
マリエ「本当？」

良治「うん。あそこを建てた建築屋が言ってたから間違いないよ。」
マリエ「悪趣味ね。でも、それって違法でしょ。」

良治「そりゃあ、そうよ。でも、そんなのが今、インディーズで結構出回ってるのよ。」
マリエ「何よ、インディーズって？」

良治「モロ。」

マリエ「モロ！そうなの？」

良治「そうだよ。」

マリエ「ふーん。じゃあ、わざわざ火の中に飛び込んでいくみたいなものねえ。」

良治「一番高い部屋が危ないんだ。」

マリエ「高い部屋？噴水がある部屋？それともすべり台？」

良治「行ったことあるのかよう。」

マリエ「こんな商売してるんだからどこへでも行ったことあるわよ。」

良治「もう手遅れだなあ。」

マリエ「でもそれってどこに仕込んであるの。」

良治「鏡。」

マリエ「本当？どこか違うの。」

良治「見たってわからないよ。臭いだよ。」

マリエ「どんな？」

良治「おいらの野生のニオイ。」

マリエ「バカバカしい。まあそんなものどうってことないわ。」

良治「何時ぐらいに帰って来るんだ？」

マリエ「わからないわ。その後また別のお客さんが入るかもしれないから。」

良治「そうか。」

マリエ、出て行こうとする。

良治「おい、金。」

マリエ、千円、投げ捨てる。

良治「千円かよ。」

マリエ「弁当ぐらい買えるでしょ。」

良治「あーあ。」

マリエ、出て行く。電話が鳴る。良治、呆然としている。

暗転。勇次がいる。

勇次（独白）「おれはこうしてここでくだを巻いて、時代の波に飲みこまれながらなんとか

やっこのことで息をしています。ともすれば酸欠になりそうなのを良治と明が支えてくれています。おれはまだ運がいい。どうしようもないやるせなさにどっぶりそのまま抜け出せられなくなつて、真つ逆さまに落ちて行く奴もいる。おい、少年法つてもそろそろ改正する時なんじゃねえのか。罪を犯す野郎にその後の懺悔を感じない奴なんているのかい。感じることは自覚があるってことさ。何も年のせいだけじゃない。裁きは年齢に関わらず司法に委ねればいい。それがそもそも日本国民の義務だろう。それにしてもあいつらは遅いなあ。おれを置いてどっかに行っちゃまいやがったのかな。」

喫茶店 勇次と拓也

拓也、登場。

拓也「それは美学じゃないよ。」

勇次「何？」

拓也「おまえの言うのは美学じゃない。」

勇次「美学？美学じゃないって言い切れるってことは、それがはっきりわかっているんだな。」

拓也「ああ、少なくとも組織的に、体系的にわかっているつもりだ。それはつまり美の学問というだけでなく、それがそれ自体として存在する理由や、学問的に、或いは芸術的にどういう位置を占め、どういう影響を与えるかということに関して僕なりにある程度の答えはでている。」

勇次「美学とは感性の問題だ。何が美しいかということは、自分で決めるんだ。美しさに規定があつてたまるか。美しさとは唯一独占欲をそそのものでなければ意味がないんだよ。」

拓也「美学とは学問だ。学問というものはあくまでも先人が築いてきたものを深掘りし、吟味していくことにその本質があるんだよ。」

勇次「わからないな。美しいと思えば、それは美学じゃないのか。」

拓也「美学じゃないよ。それはただ（自分にとって美しく感じられる）ってことにすぎないんだよ。」

勇次「じゃあ何かい。例えば政治学つてもものにも学問的な体系があるのかい。」

拓也「もちろんだよ。」

勇次「そのわりにはたいした政治がはびこってないじゃないか。」

拓也「それは論理のすりかえだよ。政治が悪いということと政治学が体系化されてないというのは全く論点が違っている。」

勇次「わからないな。」

拓也「だけど、例えば美の目利きというものはあるのかもしれないな。」

勇次「美の目利き？」

拓也「例えば陶器なら陶器の本物、偽者だけではなくてゴマンとある美しい本物の中の真に美しい物を見分ける目とでも言ったらいいか、それは知識ではなくて訓練に訓練を重ねた末の眼力の厳しさのようなものはあるかもしれない。」

勇次「おれに美の目利きが足りないってことなのか。」

拓也「だからそう決めつけるなよ。それを学んでいくのが美学じゃないのか。」

勇次「わからないな。」

拓也「だからただ美しく感じられるだけが美学じゃないんだよ。おまえの言っていることはただの感覚の問題だ。学問でもなんでもないよ。」

勇次「眉毛ひとつ動かすだけでも人の心はわかるんだぜ。何が学問だよ。人の進んだ道を辿るだけなら机の上のまやかしで終わっちまうぜ。」

拓也「学問は極めれば極める程、人間の本質に迫ってくるんだ。それがどれ程のものかは今のおれにはわからないけど。少なくとも感覚だけで生きていたのでは人類は進歩しないよ。」

勇次「静かな川の面でさえ絶えず動いているんだ。おれがしようとしていることはそんな退屈なことじゃないんだよ。おまえみたいにわかったようにものを言う奴は信用できねえ。」

拓也「何もそんな。おれはただ、おまえがあまりにも幼稚くさいことを言ってるから。」

勇次「幼稚くさくてもいいじゃないか。人の為に生きてるわけでもあるまいし。」

拓也「勇次、大学に戻って来いよ。」

勇次「嫌だね。」

拓也、立ち上がり、ゆっくり帰っていく。

勇次「おい。」

新宿・路地裏

勇次、あたりを見渡す。

勇次「何だ、夢か。」

良治、明、登場。

勇次「おれたちはいつとも一緒にここにいたんです。太陽の光が眩しすぎても、世の中が嫌になることもなく、いつも闊達に楽しくやっていたんです。」

勇次、良治、明、街を闊歩する。

勇次「その昔、終戦直後のヤミ市は人があふれ、そこからろくでもない連中が愚連隊なるものを組織して街を闊歩していました。彼らはとても粋でカッコ良く。少年たちの憧れの的でした。そんな彼らに憧れて、そして、そんな風になってみたものの、どっちを向いたってカッコ良さとは程遠く、虚しさばかりが漂っています。あれは何だったのでしょうか。砂漠の蜃気楼のようにそう見えただけだったのでしょうか。こうしてしがないスカウトがいまの

良治「おーい、参ったなあ。女なんてどこを探したっていやしねえじゃねえか。本当にここに来るのかよ。」

明「本当だよ。」

良治「どこで知り合ったんだよ。」

明「ラッパ屋の前だよ。」

良治「ラッパ屋って乾物屋だろう。何でそんなところに女がいたんだよう。」

明「いたんだからしょうがねえだろう。美人だったんだ。」

良治「うそ。」

明「自分の目で見て確かめろ。」

良治「だから待ってるんだろう。」

明「そうか。」

勇次「あつ、あいつじゃないか。」

良治「大きいな。でかいのか？」

明「百八十センチぐらい。」

サラリーマンが通りすぎようとする。

勇次「あいつか？」

明、首をひねる。

良治「おにいさん。」

サラリーマン、ギクリとする。

良治「遊んでいかない。」

サラリーマン「わたしはそんな趣味はありませんよ。」

良治「いい子いますよ。」

サラリーマン、しばらく考える。

サラリーマン「いや、いい。」

良治「ちよつと、待ってよ。」

サラリーマン「いや、ちよつと急いでいるんで。」

良治「小柳ルミ子に似たい女ですよ。」

サラリーマン「小柳ルミ子？」

良治「そう。」

サラリーマン「うーん。本当だろうね。」

良治「本当。本当。」

サラリーマン「よし、行っちゃえ。」

良治「はい、こつち。」

良治、サラリーマンを連れて行こうとする。

サラリーマン「うーん、いや駄目だ。」

良治「何で？」

サラリーマン「駄目だ。」

サラリーマン、良治の手を振り切って逃げていく。

サラリーマン「今日は子供の誕生日なんだ。」

サラリーマン、去っていく。

良治「ちえつ。サラリーマンが。」

勇次、良治、明を睨む。

明「ここに来るって言ったんだよう。」

大女、現れる。

大女「どうも。」

明「よく来てくれましたね。」

大女「わたし約束は守りますから。」

明「ありがとう。(勇次、良治に) どう?」

勇次、良治、後ずさりする。

明「えっ? どうしたの。」

勇次、良治、首を振る。

大女「あの一、裸でも何でもやりませうけど…。」

明「(勇次、良治に) ダメ?」

勇次、良治、首を縦に振る。明、申し訳なさそうに大女を見る。

大女「わたしのどこがいけないのよう。」

勇次「どこがってそりゃあ、おい!」

良治「まさか男と男が絡むわけにはいかないだろう。」

大女「ホモ雑誌に売ればいいでしょう。」

勇次「いやあ、我々は健全なスカウトマンです。」

大女「スカウトマンに健全も何もないでしょう。」

良治「いやあ、一樣、心の良心はあります。」

大女「良心は心にきまっているじゃないの。」

良治「いやあ、親の両親と間違えちゃいけないと思って。」

大女「おだまり、坊や。わたしはね、この腹話術くんが。」

明「腹話術くん?」

大女「似てるでしょう。どうしてもこの時間、この場所に来てくれて言うものだから忙しいところをわざわざ時間をやりくりしてやってきたのよ。あたしはこれでもアポロで実輪丸宏の付き人をやってたのよ。わざわざ長崎くんだからやって来てさあ!。」

勇次「わかりました。けど、今日はもうちょっと…店じまいなんで。」

大女「店じまいだったって、私は約束の時間にやって来ただけじゃないの。」

勇次「いや、実はいまから大事な会合が開かれることになっていて。」

大女「そんなの、私とどっちが大事なのよ。」

勇次「それに遅れるとピストルで撃たれるんで。」

大女「えっ?」

勇次「(良治と明に) さあ来い。」

勇次、良治、明、脱兎の如く去っていく。

大女「何よ、ピストルなんて。わたしが握りつぶしてやるわよ。」

大女、憤然と去っていく。三人、戻ってくる。

勇次、良治、明「おーい、参ったよ。」

次郎、登場。

次郎「おい、明！」

明、次郎を見つめる。脱兎の如く逃げようとする。

次郎「逃げなくてもいい。」

明、立ち止まる。

次郎「栄治が死んでから山東会は山女の親分が仕切っている。」

明「勇次から聞きました。」

次郎「おまえのことは随分、心配していたんだぞ。」

明、次郎を見る。

次郎「山女の親分は栄治が重しだったんだ。」

明「…。」

次郎「山東会に顔出せや。」

明「…。」

次郎「どうして黙っているの、明ちゃん。おまえは組の反乱分子を取り除いたんだ。店の一軒も進呈してもらえるぞ。」

明「…本当ですか？」

次郎「本当だとも。何を怯えているんだ。この世界は生き残った奴が一番強いんだ。刺されて死んでいった奴のことなんて誰も憶えとらんのだよ。」

明、怯えている。

次郎「なあ、明。はよ、顔出せや。」

次郎、明の肩を叩いて去っていく。

勇次「（独白）明は兄貴分の栄治さんを刺して少年鑑別所に入所していました。こんな奴にも少年法は効力があってせいぜい少鑑どまり。まったくいいように出来ているんですね、少年法は。」

明、震えて「若鷺の歌」を口ずさんでいる。

勇次「おい、どこで覚えたんだ。」

明「鑑別所の看守がしょっちゅう口ずさんでたんだ。何でもこの歌を口ずさんで何人も特攻で出撃したんだって。」

良治「今はよぼよぼのじじいだろう。よぼよぼのじじいが自分を鼓舞してるだけじゃねえのか。」

明「何！」

明、良治を睨む。勇次、間に入る。

勇次「おい、よせ！」

良治「どうすんだい、山東会に顔をだすのか。」

明「…。」

良治「いくら何でも兄貴分を刺してのこの顔はだせねえだろう、え？」

明、震えている。

良治「なあ、勇次。」

勇次「うん？」

良治「おまえの美学でこれはどう判断するんだ？」

勇次「どうもこうもねえよ。自分がいいと思ったらいけばいいし、やめとこうと思ったらそれはそれでいい。」

良治「随分、簡単なんだな。」

勇次「ああ。」

良治「でも、よう、顔出したら半殺しじゃねえのか。」

明、良治を見る。

良治「普通は行けねえよなあ。」

明はその場にへたり込む。

明「どうすんだよー。」

勇次「おい、行けよ。」

明、良治、勇次を見る。

勇次「行けよ。」

良治「…。」

勇次「おまえは自分の意思で刺したんだろう。」

良治「…。」

勇次「違うのか？え？未青年でも自分の意思ぐらいはあるだろう。たとえ村岡の外道にそそのかされたとしても自分の思いで兄貴を刺したんだろう。」

良治「おれはちよつと女を捜してくるわ。それじゃあまるで火の中に飛び込んでいくようなもんだ。行きたきゃ行けよ。あばよ。」

良治、走っていく。

勇次「思い出せよ。栄治さんの口癖…。」

明、うつろな表情。

勇次「男が男で、女が女で…泣けるぜ。」

明「行くよ。」

勇次「…。」

明「大丈夫だよ。」

勇次「…。」

明、ふらふら歩き出す。勇次、退場

涙橋

明は栄治の墓にやってくる。

懐からバラの花を取り出す。放る。一点を見据えてそのまま動かない。「若鷺の歌」を

口ずさむ。

山東会事務所

山女、次郎、山本がやってくる。明を蹴る。

山女「ふざけるな、テメエ。兄貴分を刺して、ようのこのこ来れたもんだなあ、おう？」

三人で明を蹴る。

明「いてえ。」

山女「おまえみたいなクズは本当は腕でも詰めて村岡組に持っていかにやなんねえところを、それをわしが方々、手をつくしてゼニもしこたまつかって何とか丸く収めたんよ。」

明「す、すみません…。」

山女「まったく、しよぼいガキよう。」

次郎「いまはどこに身を寄せてるんだ？」

明、うつむいている。

次郎「名古屋にわしの遠縁にあたる叔父貴がいる。そこに身を寄せろ。」

明「自分のことは自分でします。」

山女「人がせつかく親切に工面しとるのに、わからんのか、このガキは！」

次郎「おやじさん。」

山女は慥然としている。

次郎「明！」

明、顔をあげる。

次郎「おまえにもう一回チャンスをやろ。」

明「えっ？」

次郎「おまえにもう一回、男になるチャンスをやろ。おまえのおふくろは何でも難しい病気なんだろう。」

明「…。」

次郎「おまけにおやじはあんなにボケちまって。小さい妹や弟はどうするんだ。おう、考え

たことあるか。少しは将来設計というものをしなくちゃ。なあ、そうだろうが。」
明「はあ…。」

次郎「大体、あの良治の野郎、見てみろよ。随分、調子に乗ってやがって、おまえの方がずっとこの稼業が長いんだろう。あんなチンコロみたいなやつにいいようにされて悔しいだろうが。」

明「そりゃあ、まあ…。」

次郎「そこでだ。おまえが男になれるとっておきの方法があるんだ。」

明「えっ?」

次郎「もつとこつちへ寄れ。」

次郎、明を手招きする。そして、懐から写真をとりだす。

次郎「こいつを知ってるだろう。」

明「…。」

次郎「こいつを殺れ。」

明、次郎を見る。

次郎「こいつは目の上のタンコブだ。わしら山東会の天敵だ。どこからともなくやってきて、いつもわしらの邪魔をする。」

明、怯えたような目で次郎を見ている。

次郎「どうした。男になるんだろう。」

明「…。」

次郎「おまえはまだ未成年だ。いまの少年法からいったら適当に調べてあとは精神鑑定で止しだ。そしたら、おまえ、あとは、おう、(明の耳元で)あの向島の野球賭博の権利、おまえにやる。」

明、なおも次郎を見ている。

次郎「そしたら小さい妹や弟はどんなに楽になることか。母親ももっといい病院にいられてや
りゃあいい。おやじもあんなくさったラーメン屋たんで楽隠居させてやれるじゃねえか。
なあ、おい。」

明は震えている。

次郎「こんなチャンスは二度と巡ってこねえぞ。」

明はなおも震えている。

次郎「まあ考えてくれや。時間があんまりねえんだ。」

次郎、退場する。

新宿・路地裏

勇次、良治、登場。

良治「（明に）どうした？」

明「…。」

良治「顔色が悪いぜ。」

明「うるせえ。」

良治「（明の胸倉を掴んで）何だよ！おれが心配してやってるのに。」

勇次「辞めるよ、おまえはすぐキレるんだから。」

明、その場に座り込む。

勇次「おい、どうしたんだ。」

明「おめえは学校行けていいよなあ。」

勇次「何言ってるんだよ。」

明「おれなんか、中学しかでてねえから。街をほっつき歩いていたらチンピラにからまれてボコボコにされて、そんなオレを拾ってくれたのが桜会の李成民老師だよ。」

良治「知ってるよ。中国から引き揚げてきた人だろう。」

明、うなづく。

明「世話になったんだ…。」

良治「どうしたんだよ。」

明、うずくまっている。

良治「またスカウト行くぞ。」

勇次「おーし。おい、行くぞ。」

明「うん…。」

良治、勇次、退場。後を追う明。

李成民、演武。

マリエの部屋

マリエ、良治がいる。

良治「今日は何時ごろ帰ってくるんだ？」

マリエ「わかんないわ。」

良治「わかんないことねえだろう。」

マリエ「わかんないわよ。いつ電話がかかってくるのかわかんないんだから。」

良治「いったん外に出れば連絡の取りようがないだろう。」

マリエ「ホテルからでる時に店に連絡するでしょう。そこでまた次の予定が入ってれば言われるのよ。」

良治「チェッ。」

マリエ「さあ、行こう。」

良治「おい、待てよ。」

マリエ「離してよ。」

良治「おい、ちよつと聞けよ。」

マリエ「もう止めて。」

マリエ、良治の手を振りほどく。

良治「なあ、今日はちよつとつきあえよ。」

マリエ「もう止めにしない。」

良治「何だと！」

良治、再びマリエの手を掴もうとする。

マリエ「もう止めなさいよ。」

マリエ、再び良治の手を振りほどく。

良治「何だよ、客とってるの田舎のおふくろにバラすぞ。」

マリエ、良治を睨む。

良治「なあ、いいだろう。」

マリエ「やめて。警察呼ぶわよ。」

良治、顔色が変わる。

良治「ふざけるな。」

良治、マリエに抱きつく。

マリエ「やめて。」

良治「何が、警察だ。警察が怖くてヤクザがやってられるかよ。」

良治、マリエにのっかかる。

マリエ「あんた、前に痴漢で捕まったんでしょ。」

良治「うるせえ。」

良治、マリエを睨んでいる。

マリエ「それで逆ギレして警察官刺して。」

良治「うるせえ。それ以上言うな。」

良治、マリエに襲いかかる。

良治「うるせえ。」

マリエ「やめて。」

もみあっている二人。やがて二人ともぐったりする。

勇次（独白）「マリエとは実は都会に出てきてからまだ一度も会ったことはありませんでした。何となく良治と一緒に歩いている女がマリエに似ているとは思っていませんでした。しか

し、どこか気だるくてそんなことさえ感じる気にもなりませんでした。本当にマリエだったら何故、会いに来ないのでしょう。手を伸ばせば届きそうなのに。人は時に思いが募れば募るほど会いにくくなるものだといいます。まあ、またそれをマリエに話せば自惚れだと言われるでしょう。そんなことを薄ぼんやり考えているうちに時間ばかりが経ってしまいます。若いうちは人から見れば若くていいと言われるでしょうが、若さの渦中は渦中でその速度に自分の考えが追いつかなくなる時があります。そんな時はこうして膝をかかえてじっとしているのです。夏ならば蝉の声、秋ならば金木犀と音も匂いもばらばらですが感じたままを感じるのが若さゆえの諦めのようなもので、こうして今日も何とか生きていこうと思うのです。」

勇次、退場。起きあがる良治とマリエ。

良治「勇次に悪いな。」

マリエ「いまさら何言ってるのよ。この痴漢男。」

良治「なに。」

マリエ、出て行こうとする。

良治「おい、ちゃんと帰ってこいよ。」

マリエ「わかんないわ。」

良治「おい。」

良治、マリエに抱きつく。

マリエ、良治を振りほどいて出て行く。

良治「あーあ。」

次郎、登場。

次郎「おい。」

良治、起き上がる。

良治「兄貴：よく、ここがわかりましたね。」

次郎「そんなもん調べればすぐわかる。」

良治「はあ。」

次郎「まあ、いい。おい。」

良治「はい？」

次郎「おまえ芝居できるか？」

良治「芝居ですか？」

次郎、うなづく。

良治「まあすぐバレちゃう方で。」

次郎「そうじゃない。演技だよ。」

良治「演技？役者ってことですか？」

次郎「そう。」

良治「そんなの小学校の学芸会以来やったことありませんよ。」

次郎「やれ。」

良治「はあ？」

次郎「うちの抱えてる興業団体が今、映画を作ってるんだが、主役の男が女とどつかにいちまいやがった。」

良治「…それでボクが代わりにって？」

次郎「そう。」

良治「冗談じゃないですよ。」

次郎「そうつぶこ言わずにやれ。」

良治「いやー…。」

次郎「明日、ここに行け。話は通してあるから。なっ。」

次郎は良治の肩を叩く。次郎、退場。

新宿・路地裏

撮影現場。映画監督、親分役の役者、登場。

監督「シーン三、戦後闇市のマーケット。村岡組に対抗する吉住連合会事務所。はい、三、二、一、スタート。」

役者「このマーケットはよ、村岡さんとわしとで作ったもんだがよ、村岡さんとわしはムシヨからの義兄弟じゃ。」

良治「おう、こんなマーケットが何の役に立つんや。今に物が自由に出来るようになったら客は誰も寄りつかんわい。これからは、ギャンブルよ、競輪場よ！こりや、うまくいけば年

に一億は稼げるんぞ。他にも宣伝やら売店やらいうてよ、銭がウジャウジャ転がってる。し
かしなあ、そいだけのもんが黙っとたらみんな村岡に持って行かれるんぞ。」
役者「しかしなあ、競輪はバクチじゃ。バクチに手をつけては、仁義が立たんわい。」

笑い出す良治。

監督「カット！オーケー。」

役者「どうもお疲れ様でした。」

役者、去っていく。

監督「リョウちゃん、いいよ。あしたはリョウちゃんが村岡組に殴りこみに行くところから
はじめるから。よろしくね。」

監督、去っていく。呆然と立ち尽くす良治。

勇次、登場。

良治「おまえで大学で美学なんて習ったんだろ。」

勇次「ああ。」

良治「人の心の美しさとはナンゾや。」

勇次「はあ？」

良治「心の美しさだよ。」

勇次「知らねえ。」

良治「何だよ、高い金払ってそんなことも教えてくれねえのか。」

勇次「そんなのは美学ってより哲学だろう。」

良治、勇次の顔をじっと見ている。

良治「わかんねえ。」

勇次「どっちにしたって簡単に答えのだせる問題じゃないよ。」

良治「そう？」

勇次「そう？っておまえが聞いたんだろ。」

良治「人は時に自分の思った答えを人に言っただけ欲しい時がある。」

勇次は良治をじっと見る。

勇次「それは顔かたちではなく、人のもっている本質のことである。」
良治「？」

勇次「人は美しさゆえにねたみも嫉妬もする。ゆえにそれは放棄したほうがいい。」
良治「わかんねえよ。」

良治は勇次をまじまじ見る。

良治「おれの言ってるはこの（心臓のあたりをさす）問題よ。」

勇次「顔の汚い人間はここも（と、心臓をさす）醜い。」

良治「そんなこと言っているのかよ。大学ってそんなこと教えてるのか。」

勇次「おれの経験からなるひとつの確信だよ。」

良治「また訳のわからねえこと言いやがって。おめえは学があるから嫌いなんだよ。明を見
てみるよ。漢字もかけねえ。いつも、ウー、ウー唸ってるだけだ。」

明、登場。しかも、ウー、ウー唸っている。

勇次「何、唸ってるんだよ。」

明「ウーウー。」

良治、明の様子がおかしいのに気づく。

良治「どうしたんだよ。」

明、良治を睨んでいる。

良治「何だよ。」

明「おまえ、おれの女と寝ただろう。」

良治「えっ？」

明、目が据わっている。

明「正直に言え。」

良治「…。」

明「ええ？」

良治「おまえの女かい？」

明「ええ？」

良治「おまえに惚れてる女ならおまえの女だけど、おまえに惚れてるのか？」
明「何だと？」

良治「おまえみたいなチンコロに惚れてくれる女がいるのかい？」
明「てめえー。」

明、良治に掴みかかる。良治、明を突き放す。さらに何度も蹴る。

明「うー。」

勇次「おい、やりすぎだぜ。」

マリエ、登場。

勇次「マリエ。」

マリエ、明の手当てをする。

勇次（独白）「おれはついにマリエと再会しました。片時も忘れたことのない女でもいざ目の当たりにするとそれが当たり前のように感じます。目の前にいるマリエはあの渚で別れた時と何も変わっていません。ただ、ちよつと痩せたかな。それと目元が少し落ち窪んだように感じます。」

勇次、マリエを見ている。

勇次（独白）「いえ、そう感じただけです。人はぐるぐる回りながらその面影に近づいていくと言います。だからマリエが明や良治のまわりを回ってボクのところに来たというのは必然なのでしょう。ボクはそんなマリエをとて愛おしく感じます。久しぶりに会っておれはマリエがますます好きになりました。」

海辺・波打ち際

波の音。四人仲良く渚に腰掛ける。仲むつまじい四人。

大女がやってくる。

一同「…。」

大女、四人を認める。

大女「あら？」

大女、四人を追いかける。軽快な音楽I.N。大女もいつのまにか輪に加わる。

良治「よし、いまから一人ひとつずつ美しいと思うものを言おう。」

五人は楽しそうに青春を謳歌している…ように見える。

勇次（独白）「こうしておれたちは少しずつ馬鹿をやりながら一緒に過ごしていました」

明、良治、大女退場。

勇次とマリエがいる。

勇次（独白）「マリエと二人きりになるのは随分久しぶりでした。」

勇次「楽しいか？」

マリエ、うつむいている。

勇次「聞いてんじゃねえか。」

マリエ、そっぽを向く。

勇次「何だよ。」

マリエ「あれから何年たつのかしら。」

勇次「何年…。」

カモメが鳴く。

マリエ「あたしお金、貯めて、お店を開くの。」

勇次「…。」

マリエ「そしたら田舎のかあちゃんを呼んであげるの。」

勇次、うつむいている。

マリエ「勇次のことはみんな心配してたわ。でも、わたしは出てきちゃったから…。」

勇次「鎮守の神様の…ほら、ほら…何ってたっけ。」

マリエ「祠ほこり?」

勇次「そう、祠。あれはどうなったんだろう。カズキが火をつけて丸コゲにしただろう。」

マリエ「ああ…あれ。しばらくそのままにして小学生に火の恐ろしさを教えたそうよ。」

勇次「そんな使い道もあるのか。」

マリエ「さすがに今は立て直したでしょうけど。」

勇次「そりゃあそうだろうな。」

マリエ「想像だけだね。そんなものいつまでも残しておくとは思えないし。」

勇次「うん。」

マリエ「結構、楽しい。」

勇次「えっ?」

マリエ「今、楽しい仲間がいて結構楽しい…。」

勇次「聞いているの?それとも自分のこと?」

マリエ「両方。こんな気持ちはじめて。」

勇次「…。」

マリエ「このままバカやっつてればいいのに。」

勇次「バカやっつてればか…。」

マリエ「寒い…。」

勇次「何も羽織るものがないや。」

マリエ、苦笑い。

マリエ「さあ、お仕事してこよう。」

勇次「…。」

マリエ、ゆっくり去っていく。

勇次（独白）「何の因果かおれはマリエと毎日顔を合わすようになりました。マリエの商売のことは知っています。でも、人は人、マリエはマリエ。マリエの横顔は以前に比べるとずっと素敵になりました。自分の意思でやっている…彼女はちゃんと生きているのです。」

良治、登場。

勇次「（独白）良治は何の因果か若手のヤクザ俳優というふれこみで少しずつ売れ始めました。本物のヤクザがヤクザ俳優になるなんて、戦後、渋谷を牛耳った安藤組の組長以来聞いた事ありません。最初はとまどいながら仕事をしていた良治も何だかその気になって、最近

じゃあスター風をふかすようになってきました。」

撮影シーン。

良治「港の見えるこの景色も今夜が見納めとなりました。私、いまこの土地を去っていきま
す。今夜だけはこの港にちよつとつきあってもらって、ここでこうして格好つけているわけ
なんです。ギターもありません。汽笛もありません。が、今、目の前の海はとても静かです。」

カモメ。

良治「カモメはこんな夕暮れにも鳴くものですね。」

良治、立ち上がり、近くのバラを拾い上げる。

良治「ここでこうして咲いた花は生きた値打ちがあつたのでしょうか。」

人影が走る。

明「ダー。」

明、良治を刺す。良治、明を見る。

良治「明……」

良治、崩れ落ちる。

明「あ、兄貴ー。」

監督「カット！」

監督、登場。良治、立ち上がる。

監督「はい、ご苦労さん。良ちゃん、いいよ。だんだん良くなってきているね。前作の『望
郷海峡』が大ヒットしているし、今年の新人賞は間違いないよ。」

明、震えている。

監督「彼も新人？」

良治「いえ、エキストラの奴ですよ。」

明、良治を見る。

監督「へえー。まあ、これからが大事だから。あんまり変な付き合いはしちやあいけないよ。」

良治「わかってますよ。」

監督「じゃあ、また、明日。よろしく。」

良治「どうもよろしくお願ひします。」

明、なおも震えている。

良治「何だよ、おまえ。」

明「…。」

良治「演技なんだよ。本当に刺す奴があるかよ。本物だったら死んでるぜ。」

明、良治の方を見る。

良治「おまえはやっぱ、そこらでポン引きしてる方があってるな。」

良治、去る。明、なおも震えている。「若鷺の歌」を歌う。

新宿・路地裏

次郎、山本、登場。

次郎「明！」

明、びくりとする。

次郎「はつきりせんかい。李成民を殺るのか殺らねえのか。おふくろのことも考えろ。小さい弟や妹はどうするんだ。おまえは兄貴だろう。兄貴が家族のことを考えてやらなきや誰が面倒を見るんだ。なっ、おまえの態度で家族の運命が決まるんだぞ。わかるか、おい。」

明「本当に野球賭博の件は…。」

次郎「おう、あたりまえだ。ちゃんとルールは敷いてある。大船に乗った気で行け。なっ、

行け。」

明、うつろな目をしている。そして、次郎を見る。

明「嫌だ！」

明、逃げようとする。

次郎「待て！」

次郎、明を掴む。

次郎「この野郎！」

次郎、明を振り回す。李、登場。

李「やめろ。」

次郎、びくりとする。李を見る。

李「おめえも変わんねえな。でっけえキャデラックにはくいスケはどうした？」

次郎「うるせえ。」

李「明はおまえの指図で栄治を刺したんだろう。また、同じことをさせようってのか。」

次郎「おい。」

山本「はい。」

次郎「おれのドス貸せや。」

山本、次郎にドスを渡す。次郎、ドスを抜く。李、ヌンチャクを取り出す。二人、構える。次郎、勇躍する。李、それをかわしヌンチャクで叩く。

次郎「うー。」

次郎、再び、勇躍する。李、ドスをさばきヌンチャクで叩く。次郎、ドスを離し倒れる。山本、あわててドスを拾う。次郎、ゆっくり立ち上がる。李、ヌンチャクを捨てる。

次郎「この野郎！」

次郎、李に向かっていく。李、次郎を叩きのめす。

次郎「ううー。」

李、ゆっくり去ろうとする。

次郎「てめえ、憶えてろよ。」

李、去っていく。次郎、足を引きずりながら退場。明は震えている。そして、懐からバラの花をだしゆっくり栄治の墓に向かう。

勇次（独白）「まあ、どうなんでしょう。戦後三十年以上も経つのにこんな映画みたいな任侠沙汰も困ったものですが、こんな馬鹿なことを大まじめにやっている連中がいるのも見上げたもので、これこそ人の生きる道といったら言いすぎでしょうか、とにかく馬鹿馬鹿しくておかしくてしょうがありません。馬鹿な奴に振り回される馬鹿もまたいるわけで、そんな奴はこの先いつたいどうなるのでしょうか。」

泪橋

栄治の墓。明は「若鷺の歌」を口ずさんでいる。

明「兄貴ー。」

勇次、マリエ、やってくる。

勇次「やっぱりここか。ここが一番落ち着くもんな。明「…。」

勇次、どかりと座り込む。

勇次「おれが大学辞めて、ふらふらしてる時に栄治さんに会って…何かこう格好良かったんだよな。」

明、勇次を見る。

勇次「男が男で、女が女で」

勇次、明、マリエ「泣けるぜ。」

勇次、明、マリエ、苦笑い。

勇次「おれたちこのままどうなっちまうのかな。」

良治、登場。

勇次「あれ、どうしたんだ？」

良治「たぶんここだろうなって。」

勇次「…何、つつ立ってんだよ。」

良治「うん…。おれ足洗おうと思って。」

勇次「えっ？」

良治「段々、売れてきたし、やばいんだよ。」

勇次「何がやばいんだよ。もともと次郎兄貴の紹介で始めたんだろう。そんなことは百も承知だろう。」

良治「まだその辺は内緒にしてあるんだ。」

勇次「次郎兄貴が承知しないだろう。」

良治「山女の親分が間に入って、おれの稼ぎの半分を入れることで承知してもらったんだ。」

勇次「半分！？まったくあいつは強欲な野郎だな。」

良治「おれはせっかくのチャンスを失いたくないんだ。だから…」

勇次「だから、何だ？」

良治「おまえたちとはもう会えない。」

勇次、明、マリエは良治を見る。

良治「もう会いたくないんだ。」

マリエ「いいんじゃない。」

良治「…。」

マリエ「会わない方がいいんじゃない。」

良治「まあ、また何か機会があればさあ…。でも、結構、楽しかったぜ。馬鹿やってさあ…。」

勇次、明、マリエ、栄治の墓を見つめている。

良治「まあ、そんなんで、しばらく、オレ、行くわ。」
一同「…。」

良治「そんなじゃあ、また、元気だな。」

良治、足早に去っていく。

マリエ「いいんじゃない、自分の人生なんだから。」

勇次（独白）「こうして馬鹿やつてた仲間が一人減りました。残ったヤツが馬鹿なのか行つたヤツが馬鹿なのかどちらかわかりませんが、なんだか少し寂しい気がします。」

暗転。

山東会事務所

明、山女、次郎がいる。

山女「おまえも辛いのお。」

明、震えている。

山女「次郎は実力の半分もださなかったのよ。こいつが本気になりやあ牛でも殺す。力をセーブして李に花をもたせたんじゃない。のう。」

次郎「まったく、おれが本気になりやあ、あんなチンコロひとたまりもないんだが。ほら、こうして力を抜いとけばヤツも油断するだろう。」

山女「そう、油断じゃ。人はいつまでも気を張つとれんもんじゃ。今じゃ。のう、明。おまえもここで真の男になるんじゃない。真の男とは目的のために手段を選ばん男じゃ。おまえもこれから家族を楽にさせてやれや。のう。例の野球賭博の件、わしが保証してやるけん。」

明、山女を見る。

次郎「親分がここまで言ってくださるんだ。何度も言うが、明、レールは敷いてある、あとはレールに乗っかるだけじゃ。」

明「わしが…もし…鑑別所送りになったら…その時は…家族の面倒をみてくれるんですか。」

山女「おう、あたりまえだ。家族に日当をだすけん。」

明「日当？」

山女「日当たり五万でどうじゃ？」

明「五万？」

山女「おう、五万ありや一家六人なんとかやっていけるじゃろう。」

明「そりゃあ、そいだけありゃあ…しかし…」

山女「しかし？」

明「栄治さんの時に…何してくれました？わしも、もし殺ったらこれで二度目です…いくら未成年とはいえ簡単には済まんような気がするんです…」

山女「何言うとするの。栄治の時はな、体制が変わったんよ。だから手厚くしてやりたくてもしてやれんかったのよ。ウチも本家筋には弱いんよ。ところが今度はバックは名にし負う山菱組よ、磐石じゃ、なーんも心配することないんよ。それにおまえなあ、極道が極道を刺したところで何が心配いるかい。極道なんて嫌われもんじゃ、警察にしてみりゃこんなのみな殺し合っついていなくなりやいぐらいに思っとするて。」

次郎「おやじさん。」

山女「そんだでよ、明くん。」

次郎「明くん？」

山女「なーんも心配いらんのよ。しっかり殺っておいで。」

山女、次郎に目配せする。次郎、ドスを持ってくる。明に渡す。

山女「ほら、道具じゃ。」

明「あの…くどいようですけど」

山女「何じゃ。」

明「野球賭博の件…。」

山女「まかしやあて、ほら、当座の小遣いじゃ。」

山女、懐から金をだし、半分引っ込める。

山女「ほれ、もってけ。頼むぞ。」

山女、退場する。

次郎「家族のことを考えろよ。学のないおまえが唯一、何かしてやれるとしたら自分の体を張るしかないのよ。頼むぞ。」

次郎、退場。明、震えている。そしてゆっくり去って行く。

海辺・波打ち際

マリエ、登場。

マリエ「青い海があつてそのまたむこうに海があつて、わたしはそこにいこうと小さな舟を買ったの。月がキラキラ輝いてその下でわたしはどこからか眠ってしまったの。波音さえおこらないその海は時々、わたしを揺り起こし、自分はまた眠りふけていく…。ふてぶてしい海だったわ。わたしの気持ちなんかわかつてくれない。わたしは時々、目を覚まさずにと眠ったふりをしてやるの。それでもいつまでもわたしの体を揺れ動かしている。やがてそれは優しい笑顔に変わり、わたしの顔をのぞきこんでいる…。わたしは薄目を明けているのを見透かされまいと寝返りをうつふりをして、あわてて体の向きを変えるのだけれど、笑顔ばかりが輝いて、わたしは思わず目を開けてしまうの。幸せはいつもそばにいてわたしはそこから逃れるのが幸せだと思ひこんでいる…。青い海はやがて深い海に変わっていき…わたしの心はその海面をなめながら静かに進んでいくの。目に見えることを喜んで目に見えないことを抱えていく…。波がサーツと輝いてそのキラメキに吸い込まれていく時、わたしはまたそのむこうの青い海にたどり着いて行くの。」

マリエ、ゆっくり横たわる。ゆっくり服を脱ぐ。背中一面に観音様の刺青。

マリエ「わたしはそれでも漕いでいく。焼かれて爛れて踏みにじられてもわたしは…漕いでいく。だから、言ったでしょ、目に見えることを喜んで、目に見えないことを抱えていく。海のキラメキが再び姿をあらわした時、わたしはそのまた向こうの海に向かって漕ぎだしていたの。」

暗転。

泪橋・李の家

音楽IN。明がいる。手にはドスを持っている。そして、はるか向こうに子供をあやしている李成民がいる。明は「若鷺の歌」を口ずさみながらゆっくり近づいて行く。

李「誰だ？」

李、身構える。

明「明です。」

李「おう。入れや。」

李、また子供をあやし始める。

明、その隙を狙いドスで李成民を刺す。

李「痛えー。」

李、崩れ落ちる。子供の泣き声。

呆然とする明。「若鷺の歌」を口ずさむ。途中から口笛が聞こえてくる。勇次だ。

勇次、ただ呆然と口笛を吹き続けている。

勇次「(独白) こうして良治も明もまたどこかに行ってしまいました。またもとのモクアミです。もともと一人で都会に出てきたのです。別に寂しいことなんかありません。」

マリエの部屋

マリエ、登場。

勇次「ただひとつだけ変わったことがあります。ようやくマリエと住み始めたのです。(マ

リエに) ホテルプラネットはカメラが仕込んであるから気をつけろよ。」

マリエ「知ってるわよ。一番高い部屋でしょ。」

勇次「ああ。」

マリエ「そんなに遅くならないと思うわ。」

勇次「ああ。」

マリエ、勇次を見ている。

勇次「何？」

マリエ「…。」

勇次「何だよ？」

マリエ「わたしのこと好き？」

勇次「えっ？」

マリエ、なおも勇次をじっと見ている。勇次、視線をそらす。

マリエ、立ちあがる。

マリエ「行くわ。」

勇次「マリエ。」

マリエ「何？」

勇次「背中の刺青、いつ彫ったんだ？」

マリエ「…。」

勇次「良治と付き合ってる時か？それとも…。」

マリエ「良治と別れてからよ。」

勇次、マリエを見る。そして、視線をそらす。

勇次「客、びっくりするだろうな。」

マリエ、大きくうなづく。

マリエ「みんな赤ん坊みたいに言うことを聞いてくれるわ。」

マリエ、ニヤリと笑う。勇次もつられて笑う。

勇次「だろうな。ちょっとそこまで送っていくよ。」

勇次、立ちあがる。明、登場。

勇次「誰だ？」

明「おれ。」

勇次「…。」

明、外で震えている。

勇次「入れ。」

明、ゆっくり中に入る。

明「すまん。」

勇次「…。」

マリエ、ハンカチで明の汗を拭いてやる。

明「すまん。」

勇次「どうすんだ？」

明「…とりあえず、兄貴のところに行ってみる。」

勇次「…。」

明、足をおさえる。

マリエ「痛むの？」

明、うなずく。

勇次「また何されるかわかんねえぞ。」

明「…行ってみる。約束だからな。」

明、立ちあがろうとする。

勇次「おい、ゆっくり休んで行けよ。」

明、首を振る。

明「こんなところを見られたらかくまってるみたいに思われるからな。とにかく、一回、顔を見たかったんだ。」

明、ゆっくり歩いていく。勇次、マリエ、退場。

新宿・路地裏

路地裏の階段。山女、次郎、山本がゆっくり降りてくる。

明「おやじさん。」

山女、次郎、山本ドキリとする。

山女「おお、明か。おまえ、ようやくたのう。どうした、その足は？」

明「ちよっとケガをしまして。」
山女「おお、そりゃあ、大変だったなあ。まあ、ゆっくり養生せいや、のう。」
明「…おやじさん、これからのことですけど…。」
山女「おう、わかっとるよ。あんじょうようやるから心配すんな。」
明「あの…家族のことですけど…。」
山女「心配するな。山東会がちゃんと面倒見るから、安心して入ってこいや。」

次郎、横でうなずいている。

明「それと…野球賭博の件ですけど…。」
山女「まかしゃあて。あいつさえいなくなりゃ後はもうこつちのもんよ。」
明「いつごろ…」
山女「いつごろ？」
明「野球賭博の権利…」
山女「いつごろ言つて、おまえは当面ムシヨに入らにやならん。それからじゃ。」
明「口約束だけですか？」
山女「なんじゃおまえは？わしが信用できんとも言うのか？」
明「いや…何かいついつ…いうもんをもらつといた方がわしも安心できますし。」
山女「何ら、おまえはそれでも極道か！」

山女、明を蹴る。明、もんどり打って倒れる。

山女「そげなこと言うならのう、なんで刺し殺す前に言わんのじゃ。」
明「わしは前があります…前がある人間に同じことを二度もするとは思えんかったんです。」
山女「そう信じたならそれでよからう。」
明「…何としても念書のようなもの…ただけんですか？」
山女「わしやあ、これでもおまえを実の子のように思つとつたが縁切りじゃ。どっかに失せろ。」
明「おやじさん、わしは人を刺してきたんです。」
山女「ムシヨでゆっくり改心せい。」
明「おやじさん。」

次郎、明を突き飛ばす。

次郎「なんなら、おまえは。おやじさんが親身になって考えてくださっているのにその態度

は！」

明、痛めた足をおさえている。

山女「おまえは破門じゃ。」

明、山女を睨む。

山女「どっちみち桜会におまえの腕の一本もさしださにやケジメがつかんしのう。」

山女、行こうとする。明、山女の足に抱きつく。

明「おやじさん、わしはこいで見離されたら…もう二度と浮かばれません。どうか、わかつて下さい。わしはこれからも生きていかにやなんのです。」

山女、明を蹴飛ばすが、なかなか離れない。次郎、明を引き離す。

山女「おい、こいつを桜会にさしだしたれや。」

山女、去っていく。

次郎「おい、まあゆつくりつとめてこいや。おやじさんはああは言っても、ちゃんとおまえのことは考えとる。家族のことも心配するな。ちゃんと日当だすからな。」

次郎、指を五本立てる。

次郎「日当五千円じゃ。」

明「五万です。」

次郎「おお、そうだ、五万だ。あとはおまえのおやじのくさったラーメン屋。あれを立て替えてビルにしてやる。」

明「ビルに？」

次郎「そうだ。そしたらもっと儲かるぞ。」

明「しかし、うちのおやじは昔かたぎの人間です。できればいまのままの方が…。」

次郎「何、言うとするの。儲けるのが嫌いな商売人がどこにおるか。まあ、全部、おれにまかしゃあって。なあ。」

明、下を向いている。

次郎「警察にはこつちから連絡しておく。懇意にしてる警部がいるから、何かと面倒をみてもらえるように頼んでおく。あとは短気をおこさずしっかりつとめるんだぞ、いいな。」

次郎、山本、去っていく。

取調室

女刑事と明がいる。

刑事「現行の少年法ではあなたは保護されています。」

明「…。」

明、刑事の方をみる。

刑事「ここに未成年の連中に殺された人たちの名簿があります。」

刑事は明に紙を差し出す。

刑事「殺された人間は実名なのに殺した人間がイニシャルだなんておかしいと思いませんか。」

明は刑事を見ている。

刑事「何ですか？」

明「おれはイニシャルになりたくて叔父貴を刺したわけじゃない。」

刑事「じゃあ、何で人を殺すんですか。」

明「それは…使命のようなもので。」

刑事「使命？」

明「え、ええ。よくわかんねえけど。殺んなきゃいけねえような、使命感のようなもので。」
刑事「ふざけないでください。人を殺した人間はいつもそんな馬鹿みたいな理屈を振りかざします。」

明「あ、ああ。」

刑事「あんたみたいな馬鹿のおかげでどれだけの悲しみが巷にあふれているかわかりますか。わたしの息子も二年前、十九歳の少年に殴り殺されました。」

明、刑事を見る。

刑事「公園で遊んでいただけなのに訳もわからず十九歳の少年に殴り殺されたんです。わかりますか、ええ？」

明「…。」

刑事「犯人は精神鑑定で異常あり…二年間の鑑別所暮らしでついこの間、出所してきました。」

刑事は明を睨む。

刑事「わたしたちは法律というルールのもとで生活を営んでいます。時としてそんな法律そのものを疑ってみたくなる時があります。特にこんな夕暮れにはね。」

明「刑事さん。」

刑事「何です。」

明「おれは保護されようと思つて人を刺したわけじゃない。おれは何が何でも生きたかったです…生きていくために必死なだけで…特に家族はおれが守つてやらなきゃいけないです。」

刑事「自分の家族のために人を殺すんですか！人の人生を踏みにじつて自分だけ生きていこうと思つているんですか、あなた！」

明「自分だけだ、なんてそんな。」

刑事「あなたたちはみんな勝手だ！」

明「刑事さん。」

刑事は明を睨んでいる。

明「おれはどうなるんです。」

刑事「どうなるって、まず、少年法で保護されています。」

明「おれ、少年法いらんないッス。」

刑事「何！」

明「そんなもんいらんないッス。」

刑事「ふざけるな。そんなものあなたが勝手に放棄できるものじゃないでしょう。」

明「刑事さん、おれはそんなんで叔父貴を刺したわけじゃない。」

刑事「じゃあ、何です。貧しさゆえに刺したとでもいうんですか。」

明と刑事は睨み合っている。

刑事「近い将来…少年法が改正されます。」

明「えっ。」

刑事「それによるとあなたはれっきとした犯罪者になる…かもしれない。」

刑事は明を睨む。

明「…。」

刑事「どつちがいいんです。え？そうやっていきがっているのいいか、堂々と犯罪者になるのいいのか。え？どうです。」

明はうつむいている。そして、刑事を見る。

明「刑事さんはどう思うんです？」

刑事はじつと明を見ている。

刑事「人を裁く、人を導くということを考えたら…はつきりしているのは現行の法律が古くなっていることだけは事実です。」

明「おれはどんな裁きでもうけます。」

刑事「改正法では十八才以上の犯罪者に死刑が適用される…かもしれない。」

明「死刑…。」

明は小さくうなずきながら肩を震わせている。

暗転。

勇次（独白）「明のそれからのことは何も聞いていません。良治はやはり、あれからまったく顔をだしません。へんな取り巻きと一緒だとイメージダウンになるからでしょう。マリエは…入院しました。客から変な病気を移されたんです。せつかく稼いだ金も入院費でほとんど消えてしまいました。ボクは…あいも変わらずここでくさくさしています。一生ここでやっつていこうなんて思いませんが、これはこれで案外いいのかもしれない。」

新宿・路地裏

大女、登場。

大女「あれ、久しぶりね。」

勇次「…。」

大女「今日は一人？」

勇次「もう廃業。」

大女「廃業？つまらないわねえ。わたしが手伝ってあげる。」

勇次「いやだよ、気持ち悪い。」

大女「えっ？なんですって。」

勇次「とにかくもう廃業なんだ。あっちへ行ってくれ。」

大女「勇次。」

勇次「えっ？」

大女「わたしがわかんないの。」

大女、鬢をとる。

勇次「拓也…。」

大女「ちっともわからなかったのね。」

勇次「大学は？」

大女「辞めたわ。」

勇次「辞めた？」

大女「そう。」

勇次「何で？」

大女「自分で辞めといて何ではないでしょう。」

勇次「いや、おまえは随分…学校好きそうだったから。」

大女「まあね。でも、女ってダメね。」

勇次「女？」

大女「どっちでも一緒よ。」

勇次「何だよ、それ。」

大女「好きな男ができたの。」

勇次、大女をまじまじ見る。

勇次「気持ちわりいなあ。おまえ、鏡見なかったのかよ。」

大女、胸を叩く。

大女「心よ。」

勇次「何、言ってんだよ。」
大女「もうめろめろよ。」

次郎、登場。

次郎「おう。」

大女「あんた。」

勇次「あんた？」

大女「わたしのいい人よ。」

勇次、次郎を見る。

勇次「兄貴、とち狂ったんですか。」

次郎「なに！」

勇次「とち狂ったかって聞いてんだ。」

次郎「おめえ、誰に向かってものを言ってるんだ。誰を愛そうと勝手じゃないの。」

勇次「おれが言ってるのは明のことだ！」

次郎、勇次を睨む。

次郎「明がどうしたって？」

勇次「ちよつと汚ねえじゃないですか。」

次郎「何が汚ねえんだ。あいつは望んでやったんだ。」

勇次「あいつにエサをやったでしょう。」

次郎「…。」

勇次「なんであんなバカを騙すんですか。」

次郎「騙したんじゃない。事情が変わったんだ。」

勇次「汚ねえ極道は事情が変わったを連発する。」

次郎「…何だい、兄貴とやろうってのか。てめえは破門だなあ。」

勇次「まだ、盃もらってないんで。」

勇次、懐からピストルを出す。

次郎「おい！」

山本、登場。手にドスを持っている。

次郎「貸せや。」

山本、次郎にドスを渡す。次郎は鞘をすて身構える。

勇次、「若鷲の歌」を口ずさむ。勇次、発砲する。

次郎「てめえ！」

次郎、倒れる。大女、悲鳴をあげて逃げていく。勇次、なおも次郎に向けて発砲する。

勇次、震えている。

メインテーマIN。

ゆっくり明が登場。続いて良治。

しばらくしてマリエ、登場。ゆっくり勇次に近づいて行く。もたれかかろうとする。

勇次、突き飛ばす。ピストルの音。勇次、ゆっくり倒れる。後ろにピストルをもった山

本が無表情に立っている。

暗転。

マリエの部屋

マリエがいる。

電話が鳴る。マリエ、電話をとる。

マリエ「はい、ホテルプラネッツですね。えっ？体ですか。大分、よくなりました。ええ、大丈夫です。七時ですね。わかりました。」

マリエ、電話を切る。化粧を始める（マイムで良い）

支度を終えて出て行くこうとする。が、思い直して反対側に向かって歩き出す。音楽I

N。マリエ、ゆっくり後ろに向かって歩いて行く。そして、階段を昇って行く。

街を見下ろし、ゆっくり…笑う。

おわり

〈参考〉・「その後の仁義なき戦い」（原作・飯干晃一、脚本・神波史男、松田寛夫）

・三十頁〜三十一頁 役者と良治の撮影シーンのセリフを笠原和夫「仁義なき

戦い・広島死闘編」より参考にさせていただきました。